「生命の教育」創始者 谷口雅春先生　今月の言葉

子供を生かしているのは見えない神の力

言葉であらわすことで不良や欠点が顕れる

教育の根本は児童にやどる無限の可能性を信じ、発見し、それを賞揚し、激励し、自信を高め、勉学に興味をもたしめることにあるのである。子供の伸びる力は「生命」の伸びる力である。生命は解放されてはじめてスクスク伸びるのである。児童に宿る本来健全な優良な伸びる力を発現させるためにはまず縛りを解放することである。心に児童の不良や欠点を見てはならないし、児童の劣等や悪意を見てはならない。見ることはあらわすことであり発現させることである。言葉で児童の不良や欠点を見てはならない。また言葉で児童の劣等や悪意を言いあらわしてはならない。（中略）

児童が、あなたの意図するように健康にならず、優良な成績を贏ち得ず、怠け癖が直らず、反抗が止まず、不良の傾向がますます増加するように見えるならば、（中略）「欠点」や「不完全」や「不良」を見て、それを言葉で言いあらわして、その「欠点」や「不完全」や「不良」に気づかせて直そうと思うからである。それは、心に思うことが顕われ、言葉で暗示することが実現するという精神科学の法則に気がつかないからである。

このわたしの提唱した教育法では、世界にはどんな劣等児も精神薄弱児童もないことになるのである。戦後、各学校では自由教育方式が採用されて、従来の「詰め込み教育」が廃される傾向になっているのは、まことに好ましい傾向であるが、それにしても、単に「自由」に放任するだけでは足りないのである。その根本に児童の生命の奥にある「円満完全なる神性」を見ることと言葉に言い現わすことがなければ、自由や放任だけでは児童は必ずしも良くならないのである。「見る」ことは「顕わす」ことであり、「言葉」は「創造者」である。

（新編『生命の實相』第40巻「はしがき」）

子供のことで取越苦労をしてはいけない

多くの母親は子供のことをあまりに取越苦労するために、却って子供に悪思念を放送して子供の健康や運命を害している。或る母親は一瞬間でも自分の眼の前にいないと心配でたまらないのである。彼は自分の想像の中で、躓いて転んでいる自分の子供の姿を思い浮べる。自動車にひかれて死にかかっている自分の子供の姿を思い浮べる。水に陥って溺れかかっている自分の子供の姿を思い浮べる。世の母親よ、何故あなたはこの反対をしてはいけないのか。こんな取越苦労が起るのは、子供を神の子だと思わないで人間の子だと思うからである。神の子は神が育て、人間の子は人間が育てる。人間の子だと思うものは終世、取越苦労をして育てねばならぬ。子供を神の子だと思うものは、子供を尊敬して出来るだけその世話をさせては頂くが、神が守ってい給うと信ずるが故に取越苦労は必要はないのである。

（新編『生命の實相』第22巻2頁）

問題は私たちの魂の向上のため

吾々に現在与えられていることは悉く、吾々の現在の魂の状態にとって、すべて教育的なものばかりなのである。その仕事を為すことにおいて、その環境に処する

ことにおいて、全力をつくし、全生命をかけ、全精神をつくしてそれと取組むことによって吾々は魂が向上するのであります。算数の問題は必ず答があるのである。それと同じく吾々に与えられている問題は必ず解決し得るからこそ吾々に其の問題が与えられているのです。神は決して吾々を難問題で苦しめて、「好い気味だ」などと笑っていられることはないのです。算数の教師は生徒を苦しめるために算数の問題を課するのではなく、生徒の内に内在する能力を呼び出すために問題を課するのと同じで、何か問題がおこるならば、それはあなたの魂の向上のために課せられたのです。

（新装新版『真理』第2巻43～44頁）

子供の天分・個性を伸ばそう

子供を育てて行く上に於て、先ず心得ておかなければならないのは人間は皆一様のものでないことであります。（中略）だから双生児で生れた子供でも、同じ環境で、同じ人が同じ食物で同じ教育法で育ててもすっかり性質が異うことがあるのであります。ですから、子供をよくしようと思う時に、大人の、しかも自分だけの尺度でもって判断しすぎて善悪を評価するといけないのであります。人間というものは皆個性が異う。個性が異うところにそこに価値がある。桜の花と薔薇の花とはどちらが美しいかというと、これは評者の好き嫌いで定まるので、桜が一層美しいという人もあれば、薔薇が一層美しいという人もあります。（中略）桜は桜でその良さを認め、薔薇は薔薇でその良さを認めなければならないのであります。人を教育するには自分が「こう有りたい」という一つの尺度をもって、その尺度に異うものは皆悪いと考え、お前は悪い悪いという批評を加えて行きますと、その批評の言葉の力によって、その児童の天分は伸びず、「僕は悪いものだ、劣等児だ」という観念を心に植えつけられて、ついに折角の天才児も一個の劣等児になってしまうのであります。

（新編『生命の實相』第47巻129～130頁）